

民国初期における国語の形成

— 胡適、黎錦熙を中心として —

船 引 一 乗

〔抄 録〕

清末以降、中国では様々な問題が発生した。その中の一つに“国語”の問題がある。その当時の知識人達は、どのようにこの問題に対処し、解決を模索していったのであろうか。

この論文では民国初期にこの問題で活躍した二人の知識人、胡適、黎錦熙が、どのようにして“国語”を生み出そうとし、普及させようとしたのか、またその“国語”は一体誰の為のものであったのかを、その時代に二人が発表した文章、論文に沿いながら、検討していきたい。

キーワード：国語、国文、語体文、注音字母

清末、特にアヘン戦争以後から一つの問題が浮かび上がってきた。言語の問題である。その当時の中国では、共通語といえば書面語のことであった。しかし列強との外国交渉、教育の普及など、口語面での共通化が急務となっていった。この論文では民国時期にこの問題に携わった二人、胡適と黎錦熙を軸にその概観をみていきたい。

胡適の国語感

胡適が1917年『新青年』に「文学改良芻議」を発表して以後、中国において“白話”と“文語”あるいは“国語”などをスローガンとした言文一致運動が巻き起こった。その後この運動は、大衆語ひいては普通語へとつながっていくが、胡適の目指していた“国語”とは如何なるものであったのかを、時代を追って見ていきたい。

“国語の文学、文学の国語”

1917年に「文学改良芻議」を発表し中国文学界に一石を投じて一年後胡適は『新青年』に「建設的文学革命論」を発表した。この論文は「文学改良芻議」が主として旧文学破壊に力点をおいて論じたのに対し、新文学を建設することに力点をおいて論じたものである。そしてここで初めて“国語的文学、文学的国語”という概念を打ち出した。このスローガンの“国語”とは、如何なるものであったのか。

胡適は、この論文のスローガン・「国語的文学、文学的国語」の意味を以下の様に説明している。

「我們所提唱的文学革命、只是要替中國創造一種國語的文学。有了國語的文学、方才可有文学的國語。有了文学的國語、我們的國語才可算得真正國語。國語没有文学、便没有生命、便没有價值、便不能殘立、便不能發達。這是我這一篇文学的大旨。」

“国語”というものは、それが独立して誕生するのではなく、まず国語の文学というものがあり、その後初めて文学の国語というものが生まれる。そしてそれが正真正銘の“国語”と成りうるとし、国語と文学の関係性を極めて重要視した。これは、これ以後の胡適の国語に対する考え方の基礎となるものである。国語の成立の為には、“国語の文学”なる物の成立が前提となるわけである。そして、その“国語の文学”を作り出すには、

「中國若想有活文学、必須用白話、必須用國語、必須做國語的文学」

と主張した。この活文学というのは、以前からの胡適の考えで文学を“死”と“活”の二つに分け、白話で書かれたものがそれだとするのである。ここでは“国語”と“白話”が並列されているにとどまり、それぞれの意味内容は示されていない。同一の意味合いを持つものかと思われるが、この二つの概念は異なるのである。しかしそれは後に検討する。

さらに文学と国語の関係を

「若要造國語、先須造國語的文学。有了國語的文学、自然有國語。～略～所以國語教科書 and 國語字典、雖很要紧、決不是造國語的利器。真正有功效有勢力的國語教科書、便是國語的文学～略～我們可儘量采用《水滸傳》《西遊記》《儒林外史》《紅樓夢》的白話；有不合今日用的、便不用他；有不夠用的使用今日的白話來補助；有不得不用文言的、使用文言來補助。～略～中國將來的新文学用的白話、就是將來中國的標準國語的人。」

とし、国語成立の為には、教科書、字典よりも文学作品の充実の方が急務であり、その為には

文言さえも補助的に用いて、国語の文学の充実をはかろうとさえしている。

この文言さえも取り込んで文学を充実させる姿勢は、1918年5月15日『新青年』で発表された「論文学改革の進行程序」の中にも

「我們若教學生『一律做白話文學』、他們畢業之後、不但不配當『府院』的秘書、還不配當豆腐店的掌櫃呢！」

という文にも表れている。つまり白話だけ教えていたのでは、豆腐屋の主人にさえなれないと主張するのであるが、では胡適のいう白話とは如何なるものであろうか。以下に見ていきたい。

国語と文学

まず始めに初期の胡適にとって「白話」とは如何なるものであるかを見ていく。

1918年1月15日『新青年』に発表された「答錢玄同書」（原題は「論小説及白話韻文」）の中に胡適の白話についての考え方が明確に表れている。ここで胡適は白話の三つの特徴を以下のように挙げている。

「(一) 白話的『白』、是戲台上『說白』的白、是俗語『土白』的白。故白話即是俗話。

(二) 白話的『白』是『清白』的白、是『明白』的白。白話但須要『明白如話』、不妨夾幾個文言的字眼。

(三) 白話的『白』、是『黑白』的白。白話便是干干淨淨沒有堆砌塗飾的話、也不妨夾入幾個明白易曉的文言字眼。」

つまり「白話」とは、わかりやすく、不必要な装飾もない俗語であるが、わかりやすい文言なら採用しても構わない、としたのである。これがこの後どのように変わっていったかを見ていく。

この当時中華民国政府も言語についての政策が数多い。重要なものとして、教育部の下で1917年、1919年にそれぞれ設立された讀音統一會、国語統一準備會がある。さらに1920年には国語講習所が設置され、また国文科を国語科に改称した。このうち、讀音統一會、国語統一準備會は、注音字母の制定に尽力し、1918年11月に教育部がそれを公布するに至り、国文科から国語科への改称も、胡適は「這個命令幾十年來一件大事。他的影響和結果、我們現在很難預先計算。但我們可以說：這一道命令把中國教育的革新至少提早了二十年。」と高く評価している。そして国語講習所は、全国に国語を広める為の人材を育成する機関であり、胡適はここで様々

な講義を行っており、後に出版されることとなる「国語文学史」もこの講習所での講義をもとにしたものである。

その講習所の『同学録』の序を胡適が1920年5月17日に書いた。それが《国語講習所同学録》序である。

この中でまず国語の誕生の為の条件として

「凡是國語的發生、必是先有了一種方言比較的通行最遠、比較的產生了最多的活文學、可以採用作國語的中堅分子；這個中堅分子的方言、逐殘漸推行出去、隨時吸收各地方言的特別貢獻、同時使逐漸變換各地的土語；這便是國語的成立。」

つまり、最も伝播していて、且つ最も多くの文学作品を生み出している方言こそが、国語の中核となりうるとする。ではその中核となる方言とは何か？ つづけて胡適は、

「我們現在提唱的國語、也有一個中堅分子。這個中堅分子就是從東三省、到四川、雲南、貴州、從長城到長江流域、最通行的一種大同小異的普通語。這種普通語在這七八百年中已產生了一些有價值的文學、已成了通俗文學——從《水滸傳》《西遊記》直到《老殘游記》——的利器」

そして、今自らが提唱している“国語”を、七、八百年の伝統を受け継ぐものとして位置づけたのである。ここでも自らがいう“国語”は、すでに多くの文学作品を生み出している事が、国語の正当性として強調されている。

さて、では国語と白話の関係を胡適はどのように考えているのであろうか。1921年7月『新青年』上に発表された『国語文法概論』を通じてみていこう。

この文章は題名からわかるように文法について論じたものではあるが、冒頭部分には国語そのものについて述べた箇所がある。

論文は“国語”とは何かという自問に答える形で始まる。“国語”とは、

「第一、這一種方言、在各種方言中、通行最廣。

第二、這一種方言、在各種方言中、產生的文學最多。」

と先に触れた「国語講習所同学録序」と同じ意見を述べる。そして文学との関係だが、《水滸伝》《西遊記》《三国志》は白話小説の成人時代を代表するものであり、つづけて

「自此以後、白話文學遂成了中國一種絕對的勢力。這種文學有兩層大功用：（一）使口語成爲寫定的文字；不然、白話決沒有代替古文的可能：（二）這種白話文學書通行東南各省、凡口語的白話及不到的地方、文學的白話都可侵入、所以這種方言的領土遂更擴大了」

“白話”には、“口語的白話”と“文學的白話”の二種類があり、この“口語的白話”とは「國語講習所同學錄序」でふれた「從東三省、到四川、雲南、貴州、從長城到長江流域、最通行的一種大同小異的普通語」である。しかしそれ自体はただ広く通じる話し言葉であり、それには限界がある。それが“文學的白話”となり、文學に侵入してより広く傳播していくと考えた。つまり胡適が目指した“國語”とは、最も広くに傳播した口語の白話が文學という器の中で洗練され、その後それが「文學的白話」となり、それらを個々人が習得していくものとするのである。その様な立場をとる胡適は、文學がいかに重要であるかを説明するため、「國語文學史」で、文學とりわけ小説の重要性を力説するのである。

「國語文學史」は1921年11月から12月にかけて國語講習所で講義したもので、漢魏六朝から南宋以後までの文學史における白話文學の正当性を論じたもので、その中で特に注目すべき箇所は、小説の重要性を論じた部分である。

第七章「南宋以後的國語文學的概論」で、北金南宋の時代に南方は古典文化の逃避地となり、北方では自由な文學作品が生み出される事となったとした。ではその自由な文學作品とは何かといえば、

「北方民間的文學漸漸的伸出頭來、漸漸的揚眉吐氣了、漸漸的長大成人了。小説、小曲、雜劇、都是這個時代的北方出產品。」

であり、小説、小曲、雜劇の三種類を高く評価した。しかし明代に至り、

「北方的白話文學三門、雜劇被南方人改成又長又酸的“傳奇”了；小曲被南方人的古典文學遮蓋住了；只有小説仍舊是北方人的作品居多、南方人如羅貫中之流也不能不用北方的通行語言來作小説。」

という状況になり、小説のみが白話の伝統を受け継いでいるとして、小説の役割を重視するのである。そして最後に、

「小説的發達史便是國語的發達史；小説的傳播史便是國語的傳播史。這六百年的白話小説便是國語文學的大本營、便是無數的“無師自通”的國語實習所。」

と主張した。この様な考え方である以上、胡適の目指す国語とは、一朝一夕に出来上がるものではなく、相当の時間を必要とするものであり、胡適にとってはその当時世に出ている注音字母などは、「國語所以能成爲一種運動、不僅是做個統一語言的工具罷了、認識幾十個注音字母、會說“我”(ㄨㄛ)“你”(ㄩ)底官腔、就算是國語嗎?—這不過是一部分的事情。最重要、最高尚的、不要忘了“文學”這一個詞!」⁽¹⁾とするのである。

つまり胡適にとって“国語”とは文学が誕生するうえで成立していくもので、注音字母は工具であり、たいした問題ではなかったのである。

それでは最後に胡適が主張した“国語”とは、一体誰の為の国語であったのかを見ていく。

1921年11月『教育雑誌』に載った「国語運動の歴史」を見よう。これには胡適の目指した国語が一体誰の為のものなのかがよく表れている。

ここで胡適は国語運動の歴史を、第一期・白話時報的時期、第二期・字母時期、第三期・国語時期、第四期・国語的文学時期、第五期・国語的連合時期の五つに分けている。そして第一期・第二期、第三期の欠点をそれぞれ以下のように挙げている。

まず第一期、第二期の共通の欠点として、

「這時期的字母、還不是爲我們設置的、是爲老百姓設置的。」

第三期の欠点として、

「注音字母、白話文用入教科書中、算是進歩了。然而限于小學、大部分对于注音字母和白話文、全不熱心。看得國語、好像是爲他—小學生—而設、不是爲我們而設。」

この時期の注音字母、白話の教科書への採用などは、一般の中国人、小学生の為であり、我々の為ではない、それ故に不十分なものであった。では胡適の目指す国語とは結局如何なるものだったか。この文章の最後にこう記している。

「總之、國語是我們求高等知識、高等文化的一種工具。講求國語、不是爲小百姓、小學生、是爲我們自己。我們对于國語、要有這樣的信心、才能有決心和耐心努力做去。這是我的一点意思。」

つまり胡適の目指す国語の最終目標は、高等知識、高等文化を求める知識人の表現手段としてのそれであったのである。この点に啓蒙的知識人としての胡適の特徴があらわれている。その彼から見た「老百姓」や「小学生」のための“国語”はきわめて不十分に見えたのである。

— 黎錦熙の国語感 —

では次に黎錦熙の考え方をみていきたい。黎錦熙は胡適とは違い、華々しく文壇に現れた人間ではない。黎錦熙が最初に国語を考え始めたのは教師としての立場からであった。

教師の立場から

黎錦熙は1890年2月（光緒16年）湖南省で生まれ、伝統的な教育を受け、秀才にまでなった知識人であった。しかしその後従来の教育に疑問を感じ田舎に引きこもり、小学、中学の教師としての生活を送っていた。しかし清国崩壊、中華民国の成立をきっかけに、教育による救国を目指すようになる。

では当時中国における教育を黎錦熙はどのように考えていたのであろうか。黎錦熙は教育を、

「我國教育、久無効果、原因雖多、而總原因實爲教材不適宜。教材者、指各教科所用之教材而言也。不適宜之教材、以本國固有之各学科、如國文、修身、本國歴史、地理等爲最；而其中又以國文一科爲最；尤以初等小學所授之國文爲最。～略～故初小國文、實可謂一切教育問題之根本問題也。」⁽²⁾

と評し、教育の中で特に“国文”に「根本問題」があるとの認識を示した。そしてこの“国文”をどのように改良していくかと言えば、

「可知初小之國文一科、不可不謀根本上之更張。更張之道、在改用語文相接近者、以爲教材而已。革去旧名、当称‘國語’。」⁽³⁾

つまりは時代に適合しなくなった“国文”を“国語”に改称し、その改良の初手として教材の完備を挙げるのである。この教材への関心は、教師としての経験から出たのもであったと思われるが、では何故“国文”から“国語”へ改称する必要があったのか。この「論教育之根本問題」の別の所では「必其能爲全國之標準者、即將來語言統一之基也」としか語っていないが、次に詳しくみていく。

“国文”から“国語”へ

“国文”から“国語”への改称が正式に決まったのは、1920年1月12日、教育部の通達からであるが、それ以前から様々な国語への改称の要求があった。例えば、1917年に全国教育会連

合会が教育部に宛てた議決のなかに「以爲将来小學改國文科爲國語科之預備」とあったり、又、同年湖南省教育会では、

「注音字母洵統一字音之方便法、然非從事於語法改良、雖有注音、亦難奏效。～略～莫如改國民學校之國文科爲國語科、將國文程度改淺、國語程度提高、仿語錄及說部書之形式、俾文與語距離漸相接近、成一種國語。」⁽⁴⁾

など各種団体の要求があった。それでは黎錦熙の考えはどうであったか。

黎錦熙は1919年に「国語学講義」という本を出版した。この書物は山西省での国語調査を中心に「国語」を論じているものである。ここで“国文”“国語”をどのように理解していたかという点、

「本國文字、謂之國文。本國語言、謂之國語。」

とし、“国文”は文字、“国語”は語言と理解している。この理解の仕方は、後に出版される「黎錦熙の国語講壇」(1921年)では、

「語言是音聲、文字是符號；語言是靠着人體的發音機關而表示思想情感的、文字是靠着兩手和紙筆墨以及印刷等工具而表示思想情感的。～略～國語是現在普通所用活的聲音；國文是代表唐宋時代過去的語法和詞類。所以國語与國文、在事實上也只好下一個不同的定義：一是代表古代的；一是代表現在的；一是死的；一是活的。」

とより深化し、“国文”とは「過去の語法和詞類」、「国語」とは「現在普通所用活的音聲」とする。この記述から考えれば‘国文科’を‘国語科’に改めるという事は、過去の語法や詞類を学ぶ学科から、現代の音声を学ぶ学科に変えるという事になる。

さらに黎錦熙は“国語”の中には音声以外にも重要な事項があると主張する。「国語学講義」には続けて、

「現在實際上經政府公佈、爲全國所傳習的、就是注音字母。但是注音字母、不過是國語的一部分。若論國語、應分三部。一曰音韻。二曰詞類。三曰語法。」

音声である「注音字母」以外にも、「詞類」と「語法」も重要であるとした。つまり‘国語’とは、現在の音声、詞類、語法を包括したものといえよう。以下、音韻、詞類、語法について少し触れておく。

①音韻

1918年、読音統一会を中心として注音字母が制定された。これによって漢字の発音を表記する記号が誕生したのではあるが、この注音字母を黎錦熙は「注音字母、不過是注明國音一種音標」であり、国音の表音記号の「一種」に過ぎないとした。では国音とは何か、黎錦熙は続けて、

「若要統一國音、尚須定標準音。～略～自然要作爲全國的標準音、北京既是首都、照東西各國以首都爲標準語之例、自然應以京音爲標準。」⁽⁵⁾

注音字母で表す国音とは、北京音を標準とすべきものとした。しかしこの「北京音」というのは、北京の農民の言葉でも商人の言葉でもない。彼の言う「北京音」とは、

「因爲北京的普通話、就是個大區域通行的官話的混合體。說到這裏、必有人以混合語是靠不住的。一定要北京的純粹方言、不可算類。這話全然不對。～略～受過中等教育這項資格、尤其要緊、並且還要加上一個條件、就是在交際時講學時等所用的普通話。」⁽⁶⁾

すなわち「大區域通行的官話の混合体」で、「受過中等教育這項資格、尤其要緊、並且還要加上一個條件、就是在交際時講學時等所用的」ものが国音の標準音であり、決して北京方言がそれではなかった。

②詞類

この「詞類」に関する問題は、黎錦熙が最も頭を悩ませたものの一つである。例えば“ねずみ”を“老鼠”と表現するか“耗子”と表現するのか、或いは全く別の表現手段を考え出すか。何れにせよ「国語統一」の爲には解決せねばならない問題だったのである。

「国語学講義」第三章・詞類において黎錦熙は問題の所在を、

「我國詞類、最爲複雜。舉其大端、第一是雅與俗不同、就是言文不一致的處所。第二是俗與俗又不同、就是方言不統一的處所。」

とし、問題の所在として一つ目に「言文不一致」、二つ目に「方言不一致」を挙げる。

I. 言文不一致

これは詞類の中には“雅”と“俗”の二種類があり、その二つが大きく隔たっているため言と文が一致せず、詞類が定まらないとする。ではこの“雅”と“俗”とは何か、続けて、

「雅詞是死詞、俗詞是活詞。」

つまり雅詞とは昔は使われていたが、今はすでに使われなくなり、しかもその意味内容が難解であるものとした。しかしこの“雅詞”も廃止する方向には考えず、

「若是教育大興、知識日進、語言的程度自然提高、和程度低的文字自相接近。那麼未死的雅詞、也就和俗詞自然融成一種、這就叫言文一致了。」

俗詞の程度を上げていき、まだ死んでいない雅詞との融合をはかり、言文一致を目指そうとするものであった。

II. 方言不一致

ここで言う方言とは一体どのような意味合いを持つものであろうか。まず黎錦熙は方言を定義して以下のようにいう。

「我國國語不統一、應分作兩方面說。一是讀音不統一。一是詞類不統一。前者可謂之方音。後者可謂之方言。」

そしてこの方音の問題は「方音問題、自定了注音字母、便有統一和調查的方法」とし、一応の解決策が見出されているのに対し、方言問題ではまだ具体的な解決策が見出されていないとする。では今後どのように解決していくか。黎錦熙は、

「將來國語辭典編成、便算有了標準詞類了。但是標準詞類、不過將意義同而方言不同的詞、從中選擇一個近文而通行的、作為標準。」

とするが、この問題では国音の時のように、北京を標準とするなどの具体的な対策は挙げられていない。

III. 語法

黎錦熙はこの問題について、音韻、詞類に比べるとまだ容易に解決できるものと認識していた。

まず問題の一つ目として「國語與國文不一致、是因所用的詞類不同」と述べ、‘国文’と“国語”の不一致をここでも挙げる。もしこの二つの詞類の違い、俗と雅の境界が打破されたならば、

「語文岐異の問題、要在詞類部解決。如果國語辭典編定了、國語法和國文法、大部分是可以互相提攜、連帶解決的。」

国語法と国文法が、お互いに補完し合い解決するとの考え方がここに示されている。

もう一つは‘方音不一致’の問題である。しかしこれも詞類の問題に比べると、語法はほとんどその影響を受けていないとしている。そして逆説的にこう述べ、

「中國的語法、何以能全國一致。就是因爲言文不一致的緣故。這話怎麼講呢、我國衍形爲文、文字不隨聲音而變。自上古至今、語音隨時隨地、變動不居。文字既脫離語言、他因政治的關係、倒一天一天的整齊統一起來。(古代諸侯國各有文字、)所以我國三千餘萬方里的大面積、四百餘兆的大多數國民、早已「臻同文之盛」、自己也就覺覺得不甚稀奇。文字既全國統一、語法是於文法而來、也就當然不自爲風氣了。」

として皮肉にも言文不一致故に語法が確固たるものになったとの認識であった。

以上に“国文”と“国語”の関係をめぐる黎錦熙の発想をみてきた。この頃の黎錦熙の目標は、過去の語法や詞類を学ぶ国文科から、現在用いられている言葉を学ぶ国語科に変更しようとしたのである。

では当時(1919年前後)の言語に関する運動を少し整理してみたい。後に「国語運動史綱」(1934年)の中で、黎錦熙はその当時に‘国語運動、と‘新文学運動、が巻き起こった年として振り返っている。さらに「国語学講義」では様々な意見があったとして、五つの具体例を挙げている。

「第一爲根本改革派。此派主張實行文字上的根本改革。～略～不如徑以世界語(如 Esperanto)爲國語。或採任何一國之文字爲第二國語。

第二爲音標文字派。此派認國語爲可保存。但文字過於繁難、必須廢除。應就標準語音、改用一種音標文字。

第三爲新文學派。此派對於國語及漢字、都不主張廢除。但欲提倡一種新文學。即名爲國語的文學。

第四爲國語教育派。此派純然是教育家言。主張先將小學國文一科改爲國語。

第五爲保守派。此派無甚主張可言。」

この内で黎錦熙自身は第四派・国語教育派に数えられ、胡適は第三派・新文学派に数えることができるであろう。胡適等、新文学派は文学、洗練された語句等の充実に重きを置いたのに対し、黎錦熙等、国語教育派は、教育普及の爲の統一された音に重きを置いたところから考え

ると、この二つの運動はお互いに補完し合っていた関係といえるのではないであろうか。

“国語”の普及

この“国語”の誕生も黎錦熙にとって難題であったが、さらに別の問題も存在した。それは普及の問題である。“国語”が支障なく広まったかといえば、もちろんそうではない。これは1920年に公布された法令からも窺う事ができる。問題は“国語”とは‘国音’でもって教えるものであるとの認識から生じたのである。

先ず1920年に教育部から出た法令をみってみる。その法題は、

「九年一月十二日教育部令行各省、自本年秋季起國民學一二年級、先國文爲語體文。」

とある。

続けてある本文でも、全国教育連合会から言文一致の為に国文科を国語科に改めよとの要請があったので、

「自本年秋季起、凡國民學校一二年級、先改國文爲語體文、以期収言文一致之効。」

と明記していて、どこにも“国語”に改めるとは書いていない。ただ先ず“国文”を‘語体文’に改めるように通達したのである。

ではこの‘語体文’と“国語”の関係は如何なるもので、何故‘語体文’とする必要があったのであろうか。以下にみていく。

1918年11月23日、注音字母が公布されて以後、教育現場では一つの問題が発生した。それは制定された国音を発音出来る教師が少なく、授業を行うことが出来ないというものである。

黎錦熙はこの状況を見て、‘語体文’なるものに着目した。「黎錦熙的国語講壇、国語教育上応当解決的問題」には、最初に「先改国文爲語体文之解釈」と題し、以下のようにある。

「因爲這兩年来語體文的書報、在社会上流行甚廣、東西洋的新學理、凭他傳播不少。」

語体文というものは、すでに社会に広く流行しており、それによって新しい学理も伝播しているとしている。つまりここで言う語体文とは、その当時盛んに使われた‘白話文’の事であろう。未だ“国語”が成立していない以上、国語の有力な候補の一つである語体文をまず教育現場に持ち込もうと企てたのである。

続けてこの“国語”を‘語体文’と表現したもう一つの理由は、

「何以不説‘國語’而説‘語體文’呢？因爲國語是要用國音教授的；部中恐怕鄉村小學、一時沒有國音教員、便不妨將本地的方音來讀語體教科書。所以第一個權宜的法子、便是暫不一定拿國音來教授國語。」

と述べ、ここではその地方での方音で教える事としている。つまり“国語”とは‘国音’‘詞類’‘語法’の三つからなるものであり、その内の二つ（詞類と語法）が未だ確立していない為に‘語体文’を持ち出したのであろう。そしてこの‘語体文’を持ち出した目的は、

「倘使都能夠練習語體文、作爲基礎、將來要統一讀音、倒是極易。」

であり、あくまでも「予備統一」なのである。

結 語

以上、胡適、黎錦熙二人の“国語”をめぐる考え方を検討してきた。胡適は啓蒙家として、国家の共通語をまず知識人に浸透させようとし、黎錦熙は教育者として、小学生から国語を教えようとした。

胡適の“国語”とは、文学作品とは切っても切れない関係であり、知識人の表現手段としてのそれであった。つまり全国に通じる話しことばである「口語的白話」を目指すのではなく、漢字で書かれた文学作品の読める、知識人の為の「文学的白話」が胡適の目指す“国語”であった。そしてその後胡適は語句の洗練化の為に古典へと歩みを進める事となる。それ故に当時制定されたばかりの注音字母は一種の「工具」であった。それに対し黎錦熙の“国語”は、‘音声’—「現在普通所用活的音声」—に対する取り組みが最も力点を置いたと思われる。旧態依然としていた‘国文’を“国語”の名称に代えることや注音字母の制定に尽力し、注音字母が一応公布に到ると、黎錦熙は続けて詞類、文法と範囲を拡大させていった。そしてこの“国語”普及の為に‘語体文’なるものに着目した。その音声、詞類、文法を兼ね備えた“国語”は、胡適のように知識人の為のものではなく、まず小学生から教えていこうとの「国語教育派」の立場であった。

〔注〕

- (1) 「国語運動与文学」1921年。今回は「胡適文集」全十二卷所収のものを使用した。
- (2) 「論教育之根本問題」1918年。今回は「黎錦熙的語文教育論著選」所収のものを使用した。
- (3) 同上。
- (4) 「国語学講義」1919年。今回は第六版を使用した。
- (5) 同上。
- (6) 「黎錦熙的国語講壇」 1921年。今回は第三版を使用した。

〔参考文献〕

- 「新青年」 1988年。上海書店。
- 「胡適文存」全四卷。胡適著。中華民國四十二年十月。遠東圖書公司。
- 「胡適文集」全十二卷 歐陽哲生編 北京大学出版社 1988年11月出版。
- 「国語学講義」 黎錦熙編。中華民國十年一月、第六版。商務印書館。
- 「黎錦熙的国語講壇」 黎錦熙講、陸衣言編。中華民國十二年三月、第三版。中華書局
- 「新著国語教学法」 黎錦熙著。中華民國十三年十月、初版。商務印書館。
- 「黎錦熙的語文教育論著選」 黎錦熙著。1996年8月、第一版。人民教育出版社。
- 「民国叢書・第四編50、国語問題討論集」 常熟朱麟公編。中華民國十年八月。中華書局。
- 「漢字の運命」 倉石武四郎著。昭和32年5月30日、第8版。岩波書店。
- 「近代中国のことばと文字」 大原信一著。1994年11月30日。東方書店。

(ふなびき かずのり) 文学研究科中国文学専攻博士後期課程)

(指導：吉田 富夫 教授)

2003年10月15日受理